

RINC

箱崎にお住いのあるおばあさんが、涙を流しなら、

思い出すのは辛いけれど、地震当時の話を語りついでいかなければ



...と仰った。私はこの言葉に風化させないという震災当事者としての責務を感じた。しかし、涙ながらに語るということは**相当な精神的負担**があるという事ではないか？



私は、おばあさんが今回話してくれたような箱崎の悲劇をある程度、話を通じて知っていた。**(=風化していない)**私を始めとするRINCは震災の悲劇をわかっているのに、おばあさんは個別的な体験を、五年経った今なお話すのはなぜなのか？

しかし、それを押し殺してまでも「東京からわざわざきてくれているのだから、話そう」という**義務感を背負ってまで**話しているように感じた。いいかえると「東京の人が来ると、語らなければならないという苦しみを与えている」ということになる。私は、苦しみを与えたくない。

そこで、RINC以外のきっかけを考えると、メディアが考えられる。

現在でも、テレビ、新聞などでは震災当時のことが度々報道される。理由は風化防止のためで、受け手は震災当時者以外を想定しているのである。しかし、テレビ新聞は無差別に配信される。震災当事者は無差別に報道される当時の話を視聴し、「**私もこの悲劇を風化させないようにしなければ**」という**義務感**が生まれる。すなわち、それは震災当事者でないひとが悲劇を忘れている前提の話であり、**しっかりと津波の危険さを認識す(風化しな)ければ語る上での苦痛は生じない。**



絶えず放映される震災当時の体験談や出来事

被災地/非被災地問わず放



では、解決方法は何か。**それは当事者でない人がしっかりとその悲劇を認識していることを、震災当事者に伝えることだ。**テレビや新聞は、当事者の語りを一方的に垂れ流すが、受け手がフィードバックすることは滅多にないであろう。しっかりとレスポンスをすれば、しっかりと当事者の方々は安心することができ、語る上での苦しみをなくせるかもしれない。

)